

# 長野色の健康づくり

佐々木隆一郎（飯田保健所）

私が長野県で公衆衛生関係の仕事を開いたのは、平成11年に阿南病院から長野保健所に地域保健推進幹として異動してからである。それまで、長野県の健康長寿や健康づくりの「うわさ」は耳にしていたが、長野県の公衆衛生活動の実態は、戦後阿南病院を核として阿南地域で千葉大学医学部農村医学研究所が中心となって行った活動以外にはよく知らないでいた。

その後の保健所勤務で転勤した各地で、すばらしい予防活動が行われていたことを示す痕跡を発見することができた。公衆衛生学や予防医学を生きる術としてきた私は「なぜこんなすごい活動を知らなかったのだろうか」と、自分の不明を恥じ、論文を探してみた。びっくりしたのは、いくつかの記録集にその活動の記録はまとめられているが、論文と名づけることができる文献を発見することは非常に難しかったことである。また、長野県の健康長寿の理由についても、記述されたものは、厚生労働省の研究班の成果をまとめた水野肇氏の著作しか発見できなかった。いわゆる「びんびんころり」で有名になった本である。

これは、私の不勉強もあるが、長野県の公衆衛生関係者が、長野県の健康長寿の理由をきちんと分析したことがないこと、自分たちの活動が他の地域のものに比べて非常に優れているということに気がついていないことなどに起因するのではないかと考えた。

そこで、自分の周りの保健師さん、栄養士さんたちの活動を、回ってくる出張報告書等を読むことで検討してみた。講演を「聴き」に行くことはあっても、学会で「発表」することは非常に少ないことを発見した。以前、長野県の公衆衛生関係者が多く出席する、長野県が開催している「健康づくり発表会」に参加したことがあるが、科学的な pure review を行っている場ではないことも分かった。

こうした個人的な発見が、信州公衆衛生学会の設立を思い立たせた一番の理由である。疫学的な知識は、教科書を読めばある程度理解することはできる。しかし、疫学的知識を公衆衛生の現場に活用する技術は、良く計画された健康づくり介入への挑戦と、専門家からの遠慮のない、かつ真摯な批判・評価（pure review）によって獲得できると信じている。根拠に基づく公衆衛生活動（Evidence based public health）が求められている公衆衛生行政の現場で、真に活動することのできる専門家を育てるためには、まず学会を立ち上げ、pure review に曝される発表の機会を与えることが重要だと考えたわけである。

話は少し変わるが、長野県の健康長寿の理由を少しだけ探ってみると、長野県の健康長寿は考えていたよりもずーと長い歴史によって築きあげられたものであることがうかがえる。戦後、結核予防婦人会によって維持されている長野県の結核の低頻度は、大正末期から昭和の初期には、既に全国の値よりかなり低くなっていたのである。昭和42年に脳卒中死亡の減少をターゲットに始められ、2008年に40周年を迎えた食生活改善運動は、県下で初めて国保制度を導入した大下条村（現阿南町の一部）では、戦前から村をあげての自発的な栄養失調対策として始められていたのである。南信に「ヤギのせり市場」があるのも、当時蛋白源としてヤギの乳を活用していたことと無関係ではないと勝手に考えをめぐらせている。

いずれにせよ、長野県の健康づくりは、県民、住民の場で医療を行った医療関係者、及び行政が一体となって開始された、まさに「長野色の健康づくり」なのである。信州公衆衛生学会が、活発な学会活動を長く継続することが、「長野色の健康づくり」を再び活発にする源であると信じているところである。

